異世界でもデキる妹はいかがでしょうか？
小説 089タロー
挿絵 黒澤清崇
立ち読み版

序章　妹姫たちと再会と王子と　006
一章　妹姫たちと玉座とイチャラブと♪　031
二章　妹姫たちとハーレムと　068
三章　妹姫たちのハーレム初夜！　082
四章　妹姫たちと後宮と子作りと♥　131
五章　妹姫たちと火種とラブラブと　172
六章　森と湖と愛しの妹姫たちと♥　204
終章　妹妃たちと世継ぎと王と　248

登場人物紹介
Characters

アリシア・ヴァルトハイム

明るく純真無垢な第一王女。妹たちの前ではお姉さんとして振る舞うが、兄と二人きりの時は甘えたがる一面も見せる。

エスト・ヴァルトハイム

お堅い雰囲気の武人気質でクールな第二王女。雰囲気に反して尽くすタイプ。ムッツリなところもあり、エッチの知識は豊富。

モニカ・ヴァルトハイム

一番の良識人を自称する第三王女にしてエストの双子の妹。姉たちに比べて発展途上な身体つきがコンプレックスなツンデレ娘。

ヴィン・フランベルド

地方貴族の嫡男で生真面目で人当たりがよく人望がある好青年。ヴァルトハイム王国の姫たちと幼少期を共にした。

にヒクつかせ始めている。
スカートをたくし上げ、少し震えているアリシアの太腿に、ヴィンは顔を突っこんだ。
「ああっああ――っ！　なに、これぇっ、お兄様、わたくし怖い、怖いです、ああんっ！」
きっとオナニーすら知らないのだろう。あまりに無垢で、イクという感覚さえ分かっていないに違いない。
まったく未知のクンニ体験に、アリシアは困惑しわなないた。
「はぁはぁ、お兄様、わたくしどうにかなってしまいそうっ……！」
「はあ、ごめん、もっと優しくするから。だから触るよ、おま○こも、おっぱいも……！」
わずかに残った理性を振り絞り、ヴィンはクンニをやめ、彼女の身体を正面から抱いた。
右の手指でラビアをゆったりと解しつつ、左手で乳房をやんわりと揉む。
「あはぁ、はぁ、はぁ、今度は指でぇ、あはぁっ、痺れる、性器が、おま○こ……おっぱいもぉ……！」
不慣れな愛撫だが口よりは刺激が強すぎないらしい。アリシアは少し表情を緩め、瞳に陶酔の色を見せ始める。
「どう、してぇ、おま○こがくちゅくちゅとぉ……濡れてしまいます、熱くなってきて、じんじんして、はぁあっ」
「アリシア、おっぱいも見るよっ」
「あっ、お兄様ぁ――やんっ」

――ぶるんっ、たぷぷんっ！

ドレスの胸元が引き下げられると、たわわな乳房が大きく揺れてまろび出てきた。

その生乳房は、まるでメロンのように大きくて丸かった。きめ細かな肌は白く、小さな先端は桜色で、美と色香と豊満さを絶妙にあわせ持っていた。

ヴィンはラビアをマッサージしながら、白いメロンに指と舌を這わせる。

「はぁあ、はぁあっ、お、お兄様ぁ、そんな……胸が、気持ちいい、です……どうして、おま○こもだんだんと、気持ち、よくぅ……」

困惑の色を残しつつも、アリシアは初めて快楽を口にした。指と唇による丁寧な刺激が、適齢期の若い肢体を目覚めさせてきたに違いなかった。

熱っぽい吐息を漏らしながら膝立ちで小さく震える彼女に、ヴィンはさらなる刺激を加える。

「はぁあっ!?　お、お兄様ぁ、指先っ、おま○この中にぃぃ……あはぁ動いてぇ、くりくり回してぇ……あんっ、胸にもキスをぉッ……！」

アリシアはぎゅっと目を閉じて、初めての官能に腰を捩った。優しく掻き回される淫唇、ちゅぱちゅぱと吸われる白い乳肌、二つの刺激が折り重なって着実に性感を高めていき、薄いピンクの粘膜からは次々と蜜が溢れ出てきた。

そんな自分に戸惑って、彼女は切なげに首を振る。

「はぁはぁ、やだ、腰が動いてしまってぇっ……恥ずかしい、でも気持ちいいっ、お兄様、

わたくしなんだかぁッ……！」
「あ、兄上ぇ、姉上ばかりでなく、もっと、私もぉ……」
「ヴィン兄様ぁ、お、お願い……」
「エスト、モニカ……分かった、さあおま○こをこっちに！」
おねだりしてくるエストとモニカもまとめて目の前に並べると、彼はいよいよ全力で愛撫を開始した。
「あっあひいいいっ！　兄上ぇ、指がっ、中にいいっ！　ひっらめ淫核はぁ、舐めるの、ひいいっ！」
「ヴィンにいさまぁいやあんっ！　お尻撫でるのぉ、あん後ろからは、は、恥ずかしいっ、きゃうん舌ぁっ！　奥まではいってくるうっ！」
「お兄様ぁ、わたくしだめぇ、胸ぇ、おま○こっ、痺れてぇっ……！　あぁなにか来ます、すごいのがびりびりと、ああどうして、声が、声がっ、ああ――っ！」
エストのラビアを舌で舐め指でこすり、モニカの粘膜を尻を撫でながらタップリと啜る。アリシアの乳房をまた触って、割れ目と一緒に念入りに指で揉み解す。それらの動きに躊躇いはなく、今や淫欲がむき出しだった。
彼女たちも、繰り返される熱烈な愛撫に高まる官能を隠さなかった。頬は上気し、肌は大量の汗を浮かせ、ラビアからはこんこんと蜜を溢れさせる。初めての快感にわななく表情は初々しいのに艶めかしく、若い女の色香と反応を存分に思い知らせてくれた。

（こんなに欲情したのは初めてだ！　気が変になるくらいにっ。もう十分だろう、入れたい、早くぶちこみたい！）

アストリアの存在もどうでもよくなっていた。否、すでに目の前の乙女たちしか見えていない。とっくにトロトロになったヴァギナを肉棒で貫きたくて仕方ない。

飢えた獣のように鼻息を荒らげながら、ヴィンは宣言した。

「はぁ、はぁ、い、入れるよ。みんなのおま○こに、僕のちんぽを……！」

「お兄様ぁ……」「兄上ぇ……」「ヴィンにいさまぁ……」

妹姫たちの綺麗な顔は、すっかり愉悦で蕩けてしまっている。モニカの大きな瞳でさえ、目尻が落ちて半開きになっていた。

気づけばシーツにはたくさんのシミとシワがあり、少女たちの乱れ具合が知れるよう。まさにハーレムらしいと思う。

「フフ、さすがね。貪欲な姿、素晴らしいわ。さあヴィン。遠慮は無用です。お好きな子から存分に種付けしてあげなさい」

「はぁ、はぁ、お兄様、お願いです、わ、わたくしから……」

白いドレスを乱れさせたままアリシアがそっと身を寄せてくる。

ヴィンは頷くと、気が急くまま彼女を仰向けに横たえ、その両足をガバッと開く。

「ああっ、こんな格好、恥ずかしい……あっ、おちんぽの先が、おま○こにぃ……」

V字に開かれた両足のつけ根、濡れそぼった美しい花弁にぴたっとカリをあてがう。

「いくよアリシア。僕が――初めてをもらってあげる」
「はい、お兄様……♥」
心の底から嬉しそうな、華のようなアリシアの微笑み。
その火照った顔と潤んだ瞳を改めて魅力的だと感じながら、ヴィンはどうにか入り口を探り当て、腰を前へと押し進めた。
――ずぷっ、くちゅる……ぷつっ！
十分に解した柔らかな膣に、太い肉棒がしっかりと入る。途中にあったかすかな抵抗を硬い先端で突き抜けて。
瞬間、アリシアの眉根に縦ジワが寄り、結合部からは薄い朱色が一筋垂れる。
（入った。繋がった。ついに僕は、アリシアの処女を……！）
激しい興奮が脳髄と背筋を駆け抜けた。
そう。本当はこうしたかった。美しく育った妹のような存在のプリンセス。いや、本物の妹か。その彼女の魅惑の肢体を、本音では抱きたかったのだ。
媚薬が完全に回ったせいか、驚くくらいすんなりと認める。と同時に、初めて体感する乙女の膣内の、鮮烈な快感に身震いした。
（これがおま〇こっ！　くぅ、甘美だとは聞いていたけど、なんてすごいんだっ！　ちんぽの感覚が溶けそうだっ！）
中は細やかなヒダが連なり、表面には小さな突起が所狭しとびっしり並ぶ。蜜で濡れた

粘膜そのものは蕩けそうなほど柔らかくて、まるでぬるぬるしたカズノコのようだった。
それでいて全体は処女らしく狭くて、柔軟に形を変えながらも、きゅっとペニスに吸いついてくる。締まりのよさと柔らかな感触が絶妙にマッチした、まさに甘美としか言いようのない極上の空間だった。
「はぁ、はぁ、お兄様っ、わたくし――ついに、一つに……なれたんですね」
アリシアは再び、柔らかな微笑みを浮かべた。
「感じます。お兄様の熱いおちんぽを。あぁ、おま○この中でびくびくと脈を打って……嬉しい。とっても嬉しいです。不思議、こんな気持ち、初めて……」
痛みはどうにか耐えられるのか、呼吸は荒いがさほど苦しむ様子はない。むしろ膣内にある存在感に、感動を覚えているようだった。
「夢みたいです。お兄様とこうして結ばれて、妻として、お世継ぎ作りを……このまま繋がって、抱きあって、白いお子種を注いでいただいて……それでお世継ぎができるんですね？　わたくしのお腹の中に、お兄様との愛の結晶が」
白い掌を下腹部に当てて、幸せそうに彼女は言う。
その笑顔は優しく、ひたすら純粋で美しい。青い瞳には一片の迷いも後悔もなく、愛する兄と最後まで添い遂げ、子を成したいという一途な想いで煌めいていた。
だからこそヴィンはより熱く燃えあがり、
「まだだよ。本番はこれからさ。さあアリシア、子作りを始めるよ！」

「えっ、お、お兄様、動いて――はああっ⁉」
愛欲のまま腰をスライドさせ、初心な膣肉をこすっていた。
「お兄様、これは、あんっ！　ひぁ、おちんぽが、おちんぽが、中でぇえっ！」
「そうだよアリシア、こうやって動いておま○こでちんぽをしごいてもらうんだ。そうすると気持ちよくなって、くっ、白い精液が出ちゃうんだ！」
「そんな、おま○こでおちんぽをぉ――あはぁあんっ！　あんあんあんあんっ！」
入れて中に出すだけなのだと解釈していたのだろう。可愛らしく鳴くアリシアの表情は、強い困惑に彩られていった。
「あんあんっ、おっ、おま○こが、おちんぽに抉られてぇっ！　こんな、腰をがんがんと打ちつけてっ、あんっ、お腹の中っ、ぐりぐりとぉっ！」
青い瞳には涙が浮かび、受け止める肢体は刺激にびくびくとはねる。捲れたスカートはくしゃくしゃになって、突かれるごとにシワを大きくしていく。
白い肌もますます上気し、カリ首で粘膜を引っかかれるたび新たな汗珠を浮かせていく。
未体験の感覚と動作に、アリシアはすっかり翻弄されていた。
（素晴らしい、なんという気持ちよさだ！　手でしごくなんて比じゃない、最高だっ！
それに、ああっ、おま○こがもう蠢（うごめ）いてくるっ！）
しっかり準備したおかげだろうか。本人の意識とは無関係に、彼女の膣肉は早くも順応し始めていた。

カズノコ状の柔らかな粘膜は、忙しなくこする動きにあわせて小刻みに肉棒を締めつけてくる。ツブのあるヒダも独立したように個々に動き、少しずつだがまろやかな蠕動をするようになってくる。

そこから生まれる粘膜の擦れあいは震えがくるほど快感で、目の奥がチカチカするような猛烈な射精感がやってくる。

「はあっはあっ、お、お兄様の、おちんぽぉ、すごい、太くって長いぃ、お腹の中が全部捲れてぇぇ……きゃあんっ⁉　奥のほうっ、ごつんごつんって当たってますぅっ！」

愛欲に任せた強い突きこみにアリシアの巨乳もたゆんたゆん揺れる。硬くしこった桜色が楕円を描いて踊る様は、とても扇情的で牡の本能をさらに加熱する。

「はあはあ、アリシア、アリシアあっ！」

——ちゅうっ、ちゅう〜〜〜っ！

「はあああっ⁉　おにっ、お兄様ぁっ、おっぱい、乳首吸ってぇっ！　きゃんっ、ああ腰も激しくううっ！」

——じゅっぷじゅっぷぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ！

ヴィンは巨乳にむしゃぶりつきつつ、野獣のように腰を振りたてていった。

もう待てない。彼女のおま〇こは本当に気持ちよくて最高だ。汗の浮くおっぱいも美味だし、こりこりした突起の感触がまたいい。もう少し長く味わいたいが、射精への欲求がすでに限界だった。

「あ、あの兄上が、ああも猛々しく……まるで猛獣だ……！」
「怖いくらい激しい……ヴィン兄様、本当に媚薬で……！」
手首を掴み組みふせるように腰を振る姿は、エストやモニカにも驚きを与えているようだった。傍からすれば獲物を貪る肉食獣にも似て見えただろう。
だがアリシアは、乱暴なくらいの兄の行為に、愛と悦びの表情で応えた。
「はあっはあっ、お兄様、こんなにもわたくしを求めてぇっ……これが、これが夜伽っ、子作り、なのですねぇっ……！」
乳房にしゃぶりつく兄を見下ろし、甘い鼻声を交えていう。
「嬉しい。あんっ、深く繋がって、溶けあうようにぃっ……感じます、お兄様を、お兄様の熱い想いをぉっ……！」
声に反応しヴィンはつと、顔をあげる。妹姫と視線が交錯する。
「はあぁぁっ……愛してます、お兄様。いっぱい……ください。白いお子種、いっぱいください。お世継ぎを授けて——産ませてください……！」
快楽と愛情でトロンと蕩けた、キラキラと濡れた青い瞳。その包みこむような優しい笑顔の、なんと美しく愛らしいことか。
それを見たヴィンは、愛情と種付け欲が一気に膨らむのを感じた。
「アリシアっ——綺麗だ、好きだっ——出すよ、アリシアの中にぃっ、ちゅっ！」
「んふぅっ、お兄様ぁん……！」

が耳を打った。
「怒るなモニカ。兄上は私たちのためを思って」
「だけど、全部ヴィン兄様のせいにしようなんて……わたくしたちの気持ちも考えてよ！」
エストに肩を抱かれながら、モニカは目をうるうるさせる。
「もし、ヴィン兄様だけがお咎めを受けて斬首なんてことになってたら、わたくしっ……一生恨んでやるんだからぁっ……」
「ごめん、ごめんよモニカ。僕が悪かった。だから泣かないでったら」
「泣いてなんかない！　怒ってるのっ！」
大きな涙目を精一杯怒らせながら、モニカはぐすっと鼻を啜る。
けれど我慢できなくなって、兄の腕に縋りついて泣きだした。
「お願いだから、自己犠牲なんてやめてよ……ヴィン兄様、大好きなんだからぁっ……」
ヴィンはなおも謝りながら、少し苦笑して思った。
確かに悪いことだったかもしれない。本人はよくても残された側は辛いはず。彼女たちだって相応の覚悟はあっただろうから、蚊帳の外に出すような真似はすべきではなかったかもしれない。
それでもああするしかなかった。政治の場において言葉は重要だ。わずかでも責任があると認めれば、それは後々まで残る。だから、妹姫たちには責任がないと、無理にでも言い張らなければならなかった。

「お兄様のお気持ち、分かります。わたくしがお兄様の立場でも、同じことをしたでしょうから」
　テラスの手すりに手を置いて、アリシアが静かに言った。
「ごめんなさい。わたくしたちが無理をいったせいで、こんなことに……」
「はは、いいんだよ。もういい。それに、僕の責任であることは事実なんだから」
　しゅんとしているアリシアの隣に、ヴィンは笑顔で並ぶ。
「陛下――父上にいったこと、本当なんだ。身分違いだって分かっていても、どこかで一緒になれたらいいって。兄妹になっても諦めきれなくて。だから最初ハーレムに行くのを嫌がったんだ。好きな人がいるのに、ほかの女を抱かなきゃいけないのかってね」
「お兄様……」
「幸い父上のお許しも出たんだ。もう迷う必要はない。――アリシア、エスト、モニカ。僕の正妃になってほしい。そして元気な世継ぎを産んでほしい」
　すべてが明るみになったおかげか、いやに気分がすっきりしていた。こんなに清々しい気分で好きだと言えたのは初めてだった。
「お兄様……はい！　もちろんです！」
　アリシアはぱっと笑顔を咲かせて胸に思いきりダイブしてきた。
「こ、こらこら、こんなところで抱きつくなんて。誰か見てたらどうするんだい」
「平気です。だってもう公認ですもの。だめだっていわれてもわたくし、聞きませんから」

ぺろっと舌を出したものの、その笑顔はどこまでも無垢で、まるで白百合のようだった。
そのまま背伸びし唇を奪って、アリシアは豊満な胸を押しつける。
「お兄様、好きです。大好き。今夜もいっ～～ぱいお世継ぎ作りをしましょうね！」
「だ、だから、そういうことを恥ずかしげもなくこんな場所で……うわ、エストまで！」
「兄上、私とて兄上を……愛しております。それに今日また確信しました。やはり兄上は王になるべきお方。兄上、どうか私どもに世継ぎを産む栄誉をお与えください！」
仰々しい物言いだが、やってることはアリシアと同じだった。背中にぎゅっと抱きつき豊満な胸を押し当てながら、背伸びしてキスをおねだりしている。
さらに一足遅れてモニカも抱きつき、ヴィンはもみくちゃにされた。
「なによ！　わたくしだけ泣かせておいて、姉様たちと仲良くだなんて……許せない！キス、キスしてヴィン兄様っ！」
「分かった、分かったよ、みんなしてあげるから」
甘えられる兄の心地でヴィンはみんなにキスをした。
「んちゅ――もう。ヴィン兄様、キス、上手なんだから……」
「んっ、はぁ――確かに。兄上の接吻は、優しくて、温かい……心が温まるようです」
モニカとエストは唇を指で撫で、キスの余韻を楽しんでいた。
その二つの肢体が、離れないままずりずりとすり寄ってくる。
「あ、兄上、もしお許しいただけるのでしたら、その、この場で……」

「ヴィン兄様、後宮の外でもアリシア姉様としたんでしょう？　そんなの不公平よ……」
「いや、あれはだね、物の弾みというか、その――あぁぁ……」
　二人はその場で跪(ひざまず)くと、兄のズボンとパンツを床に下ろしていた。
「だ、だめだって、こんなところでエッチなことなんて……わっ、こらっ……」
「ふん、だ。ヴィン兄様だってもう立ってるじゃない。なにが物の弾みよ。昨夜もしたのに、こんなにしちゃって」
　ヴィンが止めるもモニカは聞かず、半立ちになった肉棒をこすこすとこすり始める。
「はぁ……本当に大きいんだから。精液も毎日いっぱい出るし。あんな調子だと、もう赤ちゃんデキててもおかしくないんだから」
「確かに。あぁ硬い……まるで日に日に雄々しくなっていくようだ」
　エストも青い目に恍惚を浮かせ、頬ずりするほど顔を寄せて睾丸部分を手で触る。
「このおちんぽに毎晩貫かれて……私たちの胎も、兄上の形に変えられていく……分かるのです。日に日に兄上の女になっていくのが。あぁ、今ではもう、このおちんぽを見ているだけで、身体が疼く……」
　騎士服に包まれた豊満な身体は、心なしか小さく尻を揺すっていた。淫毛に触れるスラリとした鼻も、においを嗅いでウットリしている様子だった。
「においも堪らない……少し臭くてツンとして、あぁ子袋に響くぅ……」
「んもう。二人ともせっかちさんなんだから」

唇を尖らせてアリシアもすり寄ると、白いドレスの胸元に手をかける。
そのカップ部分が下げられると、淡雪のような色合いの膨らみが、たぷんっ、と目の前で溢れ出た。
「お兄様、はしたないのですけれど……わたくしも、ほしくなってしまいました」
自分で持ちあげて突起を差しだし、アリシアは照れ臭そうに誘う。
「このままここで、抱いてください。お願いします、お兄様……」
「アリシア……くうぅっ、分かった、おっぱい舐めるからねっ！」
——ちゅうっ！　ちゅるるるるっ！
美味しそうなおっぱいを前にして、ヴィンのほうも我慢できなくなってしまった。
両手で揉んで左右に揺すり、乳輪を舐めて突起を啜る。ほのかに浮いた汗を味わい、手に余る量感をタップリと楽しむ。
「はああっ、あはぁ、あんっ、おっぱいぃ、乳首ぃ、気持ちいいですぅっ……！」
魅惑のおっぱいの素敵な感触にヴィンはたちまち没頭したが、胸が弱いアリシアもまた、みるみる突起を硬くしこらせ声に湿り気を持たせていった。
「お、お兄様、わたくし不思議……おっぱいが、あれからもどんどん痺れやすくなって……あんんっ、すぐに、熱くぅ……」
「どんどん敏感になっていくんだね。素敵だよ、アリシア」
目尻をトロンとさせ、緩くくびれをくねらせる姿は、なんとも色っぽくてそそられる。

初心な乙女をこれからも開発するのだと思うと、それだけで肉棒がギチギチと音を立てそうだった。

「兄上、やはり大きな乳がお好きなのですね。ならば、ぜひとも私の乳も……」

エストが床に跪いたまま、ジャケットとブラウスの前を開いた。

黒いブラの谷間のホックもプツンと外されると、突きでるようにぐんと膨らむぱっつんぱつんの美巨乳があらわになる。

そのおっぱいを両手で持ちあげ、エストは恥ずかしそうに見あげてきた。

「兄上、ど、どうぞ。エストの乳は兄上のものです。兄上がご所望なら、どのようなことでも……」

姉をチラチラと見ながらエストは訴えてくる。きっと自分も思いきりしゃぶられたいのだろう。

だがヴィンは、不意に新たな欲望を覚えて、肉棒を前に突きだしていた。

「エスト、パイズリは知っているかい？　おっぱいとおっぱいで、ちんぽを挟んでしごく行為なんだ」

聞いたエストは、目を丸くしてカァッと赤面した。明らかに知っている反応だった。

「してみて。お願いだ」

「っ――はい。兄上がご所望ならば、よ、喜んで……！」

エストは小さく頷いて、跪いたまま美巨乳を寄せた。

「んっ、あぁ、た、谷間で、挟んで、唾液で濡らして……こ、こうですか、兄上？」
「ああっ、そう、いいよ、気持ちいいっ……」
初パイズリにヴィンはウットリして腰を震わせた。
肉感タップリの彼女のおっぱいは勃起で味わっても大変甘美だった。はちきれんばかりの二つの膨らみは、むちむちした圧迫感と程よい滑り具合が素晴らしかった。
「はぁ、はぁ、こ、こうなのですね？　あぁ、おちんぽが悦んでいる……唾液にまみれて感じておられる。嬉しい、あぁくちゅくちゅとぉ……！」
エストは丁寧にパイズリしながら甘い声を漏らし始める。根が従順で真面目な彼女は、惚れた男に尽くすことを悦びとするのだとヴィンは気づき始めていた。
試しに肉棒でずんと突くと、エストはひぃんっ！　と可愛らしい声で鳴く。
「はぁ、兄上ぇ、私の乳を味わってくれて……どうぞ、もっと突いてください。エストのおっぱいを、もっといじめてくださいぃ……！」
「エスト、やっぱりマゾなんだね。エロいよ、すごく……！」
燃えてきたヴィンは、自らも腰をスライドさせてたわわな美巨乳を味わい始めた。
エストも呼応して、幸せそうにおっぱいを揺すっていく。
「はぁ、はぁ、ひぃん、兄上ぇ、おちんぽびくびく、谷間でずりずり、し、幸せぇ……！」
「んもう、お兄様、わたくしもおっぱいでぱいずりをしてみたいです！」
妹の淫戯を見たアリシアが、隣りあわせで跪いて、一緒になって乳房を押しつけてきた。

「ああ、姉上まで、おっぱいをぉ……ひぃん？　こ、こすれるぅ……！」
「エスト、一緒におちんぽをぱいずりしましょう？」
二人は四つのおっぱいを使って、左右から挟みこむようにペニスをしごいてきた。
――ぬちゅ、たぷっ、たぷぷっ、ぷりぷりりっ。
（おおぉ、すごい……柔らかいおっぱいとぷりぷりのおっぱいが、ど、同時にぃっ……！）
予想外の快楽刺激に、ヴィンは思わず腰のスライドを止めていた。
四方を囲むおっぱいたちは、二種類の感触で飽きさせることなく楽しませてくれた。
片やエストのおっぱいは弾力に富み、強い肉感が絶えずペニスを圧迫してくる。唾液で粘つく表面はすべすべで、よく締まるのによく滑って強い摩擦感があった。
片やアリシアのおっぱいは柔らかく、まるでつきたてのパン生地だ。ふんわりとした白い乳肉がもっちりと肉棒に吸いついてきて、形を大きく変えて揺れながら視覚まで一緒に楽しませてくれた。
「んっ、はぁん……いかがですかお兄様？　わたくしたちの、あんっ、ぱいずりは……」
「はぁ、はぁ、あ、姉上のおっぱいも、一緒にこすれるぅっ……いかがですか兄上、私たちの、お味は……」
「うぅ、すごく気持ちいいよ。おっぱいって、こんなにいいものだなんて……！」
膣とはまた違う、強すぎず弱すぎない不思議な摩擦感覚に、腰が早くも砕けそうになる。ダブルで味わうパイズリというのは想像を超えた気持ちよさだった。

しかも二人は、兄の反応に気をよくして交互に上下運動を始める。
「兄上ぇ、嬉しい、もっと感じてください、私たちのおっぱい、ぬるぬるのいやらしいおっぱいをぉ……！」
「あんっ、お兄様、おちんぽがびくびくとぉ……どうぞ、もっとびくびくなさって、いっぱい気持ちよくなってくださいっ……！」
二人は頬を上気させて全身を使って乳房を揺すった。楽しそうに笑顔まで浮かべて肉棒の反応に酔っていく。互いの乳首がこすれあう刺激も興奮を助長しているみたいだった。
「はぁはぁ、え、エストの乳首ぃ、やんっ、当たっちゃうぅ……だめぇ、わたくしも、気持ちいいっ……！」
「姉上こそ、くひぃん、こうも硬く尖らせてぇ……はぁだめです、くにくにこすれるの、かっ、感じてしまうぅ……！」
「う、うぅうっ、アリシア姉様もエスト姉様も、おっぱいが大きいからってっ……！」
そんな中モニカは、歯噛みしながらソワソワしていた。さっきからなんとか加わろうとしていたが、一緒になってパイズリする気にはなれないらしい。
ややあって彼女は背後に回ると、震える手でむき出しのお尻に触った。
「うぅ、わたくしだってっ……ヴィ、ヴィン兄様ぁっ……ちゅく、ちゅくっ……」
「うわぁ⁉　モニカ、おし、お尻の孔なんてっ——おうっ、おううっ！」
なんとモニカはお尻を開き、排泄用の孔に舌を押しこんできた。

必死な様子で舌を動かし、彼女は負けん気を見せる。
「わたくしだって、ヴィン兄様の……正妃だもの！　パイズリは無理だけど、こ、このくらいできるんだから……！」
——くちゅっ、ちゅくちゅくちゅくちゅくっ。
なおも舌で肛門をまさぐられ、ヴィンは情けないガニ股になった。
気持ちいいのか悪いのか、分からないような感覚だった。舌はぬるぬるとして快いが、肛門の開く感覚が排便時を思わせる。便意はないのに排便感があるような、寒気とも恍惚ともつかない感覚を味わった。
それに、無防備な粘膜をねぶられているという意識が、羞恥心も高めてくる。恥ずかしさが強い興奮を生み、勃起は一段と漲ってくる。
その漲った肉棒を、アリシアとエストがチャンスとばかりにしごいてきた。
「あんっ、お兄様、ますますおちんぽがそり返って……気持ちよさそう、もっと、もっと気持ちよくなってくださいっ……！」
「兄上、なんと逞しいっ、パイズリするだけで、私までおっぱいが疼くぅっ……！」
「くちゅっ——はぁ、に、ニガいぃ……けどっ、いやらしい味……ヴィン兄様ぁ、もっと舐めちゃうんだからぁ……！」
兄の反応に感化されて三人は一気に刺激を強めた。さらに奥までアナルを舐めて、おっぱいの動きを速くする。身悶えする兄の腰を押し包み、熱烈な愛撫をお見舞いしていった。

「はあっはあっ、すごい、すごいよ本当にっ！　お尻が、ちんぽが、くっ、腰全体が、壊れそうなくらい感じるッ……！」

下半身が愉悦に痺れ、足がガクガクと震えてくる。寒気と熱感がない混ぜになって頭が少し混乱してくる。背筋もぞくぞくして不思議と怖くなり、アナルとペニスのダブル快楽に溺れていいのか迷いすら感じた。

今の姿はひどくマヌケで、誰かに見られたら本気で王族の沽券に関わる。さすがにまずい。これ以上は。そうは思うが声は出てしまい、ダイナミックに揺れ踊る乳房と柔らかく抉ってくる舌の感触に、ただ翻弄されていく。

そして限界は唐突に訪れた。アリシアとエストが谷間を覗きこみ、舌を伸ばしたのだ。

「はぁんっ、お兄様ぁ、れろっ、ちゅるっ……おちんぽから精液、だしてくださぁい……！」

「ああ私も、私も舐めますっ、じゅるっ、じゅるるるっ！　精液、口にほしいッ……！」

「くっ、二人とも亀頭をっ、あああああっ！」

――びゅぷううううっ！　びゅぷっ！　びゅぷっ！　びゅぷっ！

ヴィンは身体をくの字にして、ガニ股のままの姿で果てた。

普段以上に興奮したからだろう。飛び散る精液の勢いは強く、本人の顔にまで届きそうなほどだった。

その精液の大半は、覗きこんで亀頭を舐めていたアリシアとエストに降りかかる。

けれど二人は微塵も嫌がらず、むしろ嬉々として顔中に白濁を浴びた。

「あんっ、すごくいっぱいっ！　お兄様のお子種……熱いです、ねっとりしていて、とても熱い……ああ素敵、においだけでくらくらしますぅ……」
「はあぁ、なんと濃いお子種っ。このようなものを子袋に注がれたら、私、確実に孕んでしまうぅ……孕みながらイってしまうぅ……」
乳房をぎゅうっと押しつけたまま、二人は悦に入る。鼻や唇に白濁がこびりつくも、まるで意に介さない。それどころか、残り汁まで搾り出そうと、なおも小刻みにおっぱいを揺すってきた。
「んぐっ、ぢゅるるっ――はあぁぁ……ヴィン、にいしゃまぁぁ……！」
モニカは尻に舌を入れたままぷるぷると痙攣していたが、やがてゆっくりと舌を抜くと、石床にペタンと座りこんだ。
「はぁ、はぁ、わ、わたくし、お尻の孔なんて舐めちゃって……は、恥ずか、しいぃ……」
上気した頬は汗まみれで、息は荒く、翡翠色の瞳は半開きになっている。自分で自分に驚いているのか、両腕で身体を抱いていた。
けれど口元は笑みの形に緩んでいて、チロリと漏れた小さな舌が、なんだか妙に艶めかしい。見るからに発情していて、白い太腿はすりすりと擦りあわされていた。
（モニカ――いや。みんな艶めかしい。顔蕩けちゃって、精液でドロドロになって、完全に発情してる。すごくほしそうな顔してる……）
みんな目尻をトロンとさせて、期待に満ちた表情をしている。このままここで種付けさ

れると思っているに違いない。
（――まったく。ここは王宮なんだぞ。みんなが真面目に働いている場なんだぞ。それなのにこんなにしちゃって。やれやれ……エッチなお姫様たちだ！）
結構な量を出したはずなのに、ヴィンはたちまち肉欲が漲ってくるのを感じた。
「はぁ、はぁ、ヴィン兄様ぁ、きょ、今日は、わたくしから……」
モニカがふらふらと立ちあがって、両腕を背中に回してくる。
ヴィンも両腕を背中に回し、彼女のお尻をむぎゅっ！　と掴んだ。
「きゃうんっ⁉　ヴィ、ヴィン兄様ぁ、お尻ぃ、あううんおま○こぉッ！」
「もう濡れてるねモニカ。パンツどころかスカートまでびしょびしょだ。アナル舐めただけでこんなにしちゃうエッチな正妃には――お仕置きしなきゃ！」
興奮の笑みを浮かべながら、ヴィンはモニカをテラスの手すりに掴まらせた。
そのままぐっと屈曲させてお尻を大きく突きださせると、スカートを捲りあげ、ショーツは膝までずり下ろす。
むき出しになったぷっくりとした可愛い桃尻に、ヴィンは顔を近づける。
「おお、もうこんなにびっしょりだ。パイパンおま○こ、涎を垂らしちゃってるよ」
「いやぁ、覗きこまないでぇ！　きゃう、開いちゃだめ、奥まで覗くの、いやぁあッ！」
モニカはお尻をふりふりしながら、可愛らしい悲鳴をあげた。
「ひっ、開いちゃ、らめぇ……おま○この奥の奥まで見られちゃうぅッ……恥ずかしい、

恥ずかしいよぉぉ……！」

そうは言うものの身体は熱を帯び、白い太腿を淡い桜色に染めていく。ピンクのおま○こは蜜を垂らし、奥の粘膜が視線を感じて蠢いていた。

「こんなにおま○こヒクヒクさせちゃって。ほしいんだねモニカ。僕の――お兄ちゃんの精液が、そんなにほしいのかい？」

ちょっといじわるして言うと、モニカは涙声で答えた。

「あうぅぅっ……！　ほ、ほしい、です……ヴィン兄様の、お兄ちゃんの精液、ほしいのぉッ……！」

最初の遅れを取り戻したいのか、モニカは案外と素直に言った。

「お願い……お兄ちゃん。わたくしのおま○こに、精液、ぴゅーってしてぇ……」

「ッッ！　よくいえたね。よぉし、それじゃお兄ちゃんの種を仕込むからねぇっ！」

――ずぷちゅっ！　ぱんぱんぱんぱんぱん！

可愛らしいおねだりに燃えあがり、ヴィンはバックで激しく繋がっていた。

羞恥心によるものなのか、モニカの膣内はますますもって濡れていた。動くのがキツそうなくらい狭いのに、中はぬるぬるでスムーズにペニスが出入りする。ヒダヒダも最初から蠢きまくって、勃起粘膜に強い甘美感を与えてきた。

「ひゃうっひゃううっ、いいよぉ、すごいぃ、ヴィンにいしゃまの、お兄ちゃんのおちん

ちん気持ちいいよぉおッ！」

溢れる嬌声もとても素直で、いつもより格段に可愛く見えた。「お兄ちゃん」の一言にも、妙に燃えるものがあった。

「……お兄ちゃん。わたくしたちにも、し、してください……」

モニカの右に並んで立つと、同じように手すりに手をついて、アリシアがお尻を突きだしてくる。

「わたくしも、もう、おま○こがぐちょぐちょで……はぁ、見てください。お兄ちゃんのお世継ぎほしいって、もう、ぱっくりと……」

スカートが捲られショーツが下ろされると、タップリとした豊かなヒップとぬれぬれのおま○こがあらわになる。

「兄上――お、おっ、お兄、ちゃん……私も、種付けしてほしい、です……」

モニカの左に並び、エストもまた同じ姿勢で立派なお尻を向けてきた。

タイトスカートを腰まで捲って黒のショーツを膝まで下ろすと、蜜で光る薄い割れ目を、自ら指でくぱっと開く。

「……好きなのです。愛しているのです。だから、孕ませて……妊婦にしてぇっ……！」

末妹の痴態に感化されたのか、二人は甘えた声で誘惑してくる。

とどめは肩越しに振り向いての、親指を咥えての一言だった。

「「お願い……お兄ちゃんっ♥」」

「ッッッ～～～～!!　ああ分かったとも！　任せろ、三人まとめてしっ～～かり種付けしてやるからねっ！」

「「あああああんお兄ちゃああんっ！」」

妹姫たちの快楽の嬌声が響き渡った。

本気で火がついたヴィンは、野獣のように飛びつきバックでアリシアとエストとも合体した。そして貪るように腰を振るい、濡れた膣肉を熱く肉棒で擦過した。

「あっあっお兄ちゃんすごいいっ！　激しいです、強く突かれてお尻が弾けてぇ、素敵ぃ、素敵ですぅッ！」

「ひぃ抉れるううっ！　兄うぇ、いえお兄ちゃんっ、こんなにされては私、すぐにもォ！」

「はぁはぁ、二人とも、もうイキそうなんだね？　おま○こがきゅうきゅう締まるっ！　まったく、なんてエッチな王女様なんだ！」

「ひぃごめんなさいぃッ、お兄ちゃん、私、お兄ちゃんがイクまで我慢できそぉにぃ――あひいいんだめぇッ!?　お尻っ、叩くのはああッ！」

――ぴしいっ！　ぴしいっ！

一際声の高いエストを、ヴィンは平手でスパンキングした。

「エスト、はぁはぁ、声が大きすぎるよ。エッチな声聞かれたらみんな大変なんだから」

「もっ、申し訳ぇ、申し訳ぇえッ……ひっ、ひいだめっ、強くずぼずぼしたら、また声っ、声がぁ、あひぃい！」

「ほらまた！　そんなんじゃもう種付けしてあげないからなっ！」
「申し訳ええっ、ひいお兄ちゃん、どうかお許しをぉぉっ、ひいお尻またああっ⁉」
あられもなく喘ぐエストの尻を、平手がさらにひっぱたいた。
無論、適度に加減してある。本気でやったら青あざができてしまうだろうから。
だがエストは、繰り返されるスパンキングにすら快楽を覚えているに違いなかった。なにせ叩けば叩くほど声が高くなり、くびれがクナクナと踊るのだ。蜜の量もどっと増えて、ねっとりと柔らかい奥の膣肉は蠕動を濃密なものにしていった。
その様子にヴィンは満足を覚えつつ、アリシアとモニカにも同じように腰を振っていく。
「二人もだよ。ここは王宮なんだ。声を我慢しなきゃお仕置きだよ！」
「はい、はいいっ、我慢します、口に手を当てて我慢しますから、もっとおちんぽぉ……んふぅぅぅうん！　んっんっ、だめ気持ちいいっ、声が、声がでちゃいますぅッ！」
「ひゃううわたくしもおっ！　らめぇ、おちんちん奥にごつごつあたるぅ！　これしゅき、大しゅきぃ、おま○こイっちゃう、子宮イっちゃうッ！　我慢なんて無理だよぉ！」
「はぁはぁ、まったく、みんないけない王女様たちだねっ！　これからは毎日種付けしながら躾けなきゃねっ！」
——ぴしっぴしっぴしっぴしっ！　じゅぷじゅぷぐちゅぐちゅずんずんずんずんっ！
ヴィンはノリノリで平手を振るいつつ、三つのラビアを何度も何度も、交互に忙しなく貫いていった。

（あの無垢な王女様たちが、こんなにもエッチで貪欲な子になるなんて！　僕がしたんだ、こんな子に！　嬉しい、どんどん僕のものになっていくのが分かる！）

支配するような高揚感が身の内を駆け巡っていく。そう、魅力的なこのプリンセスたちは、妹で、恋人で、正妃で、自分だけのハーレム。初心な彼女らをどこまでも自分色に染めていく悦びが、強い快楽とない混ぜになって全身に力を漲らせる。

「ああんっ、あんあんあんあはぁあんっ！　お兄ちゃんもぉだめぇ、きちゃいます、お尻じんじんしておま○こきてしまいますううッ！」

「ひいっひいっお兄ちゃん私もですうっ！　痛いぃ、でも気持ちいいっ！　もっとぶって、もっと抉ってえ、叩かれるのすきぃ、躾け孕ませ大すきいいッ！」

「お兄ちゃんもぉ限界いいっ！　きもちいいよぉ、ぴしぴし感じちゃううっ！　わたくしらめぇ、こんなんじゃまた、おぉ、おしっこ、おしっこぉおッ！」

普段以上の過激な子作りに三人はよがりによがりまくった。いつしか揃って尻を振って、スパンキングまでおねだりしている。エストのヒップなどすでにまっ赤で、ぐちょぐちょのおま○こからは蜜がぽたぽたと滴り落ちていた。

ヴィンのほうも、すでに限界は間近に迫っている。三つの蜜壷を攪拌する勃起は、混ざりあった愛蜜にまみれてびゅくびゅくと血管を脈打たせていた。

「ひいぃ、ひいっ、お兄ちゃんくださいぃ、精液ぃ、お子種ぇ、ザー汁でおま○こいっぱいぃっ～～孕ませてぇぇぇッ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

二次元ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

サイズ:文庫

リアルドリーム文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!